

大濱信泉プロジェクト『勇気づけの教育』の推進 (56)



～ 「ありがとう」感謝の言葉を伝えることを通して ～

石垣市立新川小学校 教頭 花城昌義

「新川小学校は空が近い」、本校に赴任するにあたり、前任校の職員から言われた言葉があった。2年目に入るが新川小学校にいとそれをよく感じる。本校は市内の中では最大の敷地面積がある。グラウンドは野球部とサッカー部が同時に練習できるスペースがあり、直線で100mもぎりぎりとれる。校舎内には多くの植栽があり、中央には広場がある。低学年が1階、高学年が2階、唯一の3階音楽室からは竹富島が一望できる。ゆったりとした空間で子どもたちは元気いっぱい、のびのび学校生活を過ごしている。

本校は令和元年度に教育目標を大きく変更した。これまでの伝統的な知・徳・体から「人のかかわりを大切にし、自分の力を発揮する子（社会性）を中心に、■自分で考え、自分で行動する子（自律・主体性）■「ありがとう」と言える子、言われる子（感謝・貢献・共生）■今を大切にし、努力を積み重ねる子（生き方）を、あらゆる教育活動の場面において全職員・全児童で目標に向けて取り組んでいる。これは、石垣市の教育の一環である「勇気づけの教育」につながる取り組みと同じ効果があると考えている。

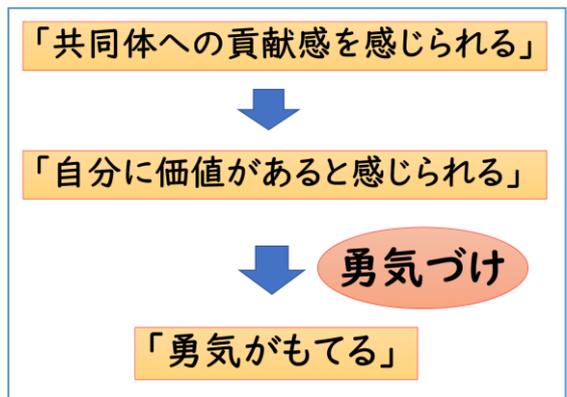
さて、アドラーという心理学者をご存じだろうか。少し前にドラマにもなった「嫌われる勇気」。その著者岸見一郎氏がアドラーについて複数著書を出され、ブームが起った。教育にも関心が高いアドラーは、教育について基本は「勇気づけ」にあると考える。親や教師は、子供が共同体感覚を持ち、対人関係の中に入っていき勇気をもてるように援助することが必要であると説いている。

また、アドラーは「『叱ること』、『ほめること』をどちらも認めることはしていない。叱られて育つと人の顔色

ばかりを窺う小さな人間になる。また、ほめてばかりいると何かしようとする時に承認されることを期待する子になる。これは、親と子の関係が上下関係を前提としているからであり、より重要なのは、縦の関係ではなく横の関係にあり、人と人とは対等である。」と述べている。親から「よくできたね」ではなく「ありがとう」「助かった」というような言葉を聞いた子どもは、「自分はお母さん（お父さん）の役立つことができたのだ」と貢献感を抱くことになり、自分には価値がある（自分を好き）と思えるようになる。それがひいては対人関係の中に入って行こうとする勇気につながると考えている。

本校では、新しい教育の1つに「ありがとうと言える子、言われる子」（感謝・貢献・共生）を掲げ、その取り組みの1つに毎月10日を「ありがとうの日」と設定している。その中で、お世話になった方や家族に感謝の作文を書く取り組みがあった。

低学年 A さんから「お母さん、いつも寝る前に本を読んでくれてありがとう。ごはんをいつも作ってくれてありがとう。ごはんもちょっと残すけど本当はおいしいよ。」そして、それを読んだ家族からは「すてきな手紙、どうもありがとう。とてもとてもうれしいです。絵本を読むのは楽しいです。いつも聞



いてくれてありがとう。」と返事があった。低学年 B さん「おかあさん、いつもごはんをつくってくれてありがとうございます。お父さんいつもお仕事してありがとうございます。これからもよろしく願います。」 家族から「いつもお母さんをたすけてくれてありがとう。『ありがとう』を言えるお姉ちゃんになってくれて、お父さんは本当に嬉しいよ。」と返事があった。

児童 A・B さんの気持ち、それに対する保護者の気持ちのやりとりは、上下関係でなく、対等な関係であるので、温かい会話になっている。この取り組みは、子どもたちが自分に価値があると感じることができないものではないだろうか。また、人は一人では生きていくことができず、生まれてからずっと様々な支えがあって生きている。人と人とのかかわりあい成長をもたらす。子どもたちが、相手を思いやり、優しい行動に気づき感謝すること、感謝の言葉を伝えることを積み重ねていくことで、新小っ子が自信を持ち、勇気づけに繋がると確信する。

最後に、本校 5 期生であり、学校長である黒島善一校長は、校長講話のおわりには、毎回「聞いてくれてありがとう」と感謝の言葉で締めくくっている。